イスパニカ 66（2022）：157-161

書評

RAE. Crónica de la lengua española 2020. Barcelona. Planeta, 2020, 968 p. / RAE-ASALE. Crónica de la lengua española 2021. Barcelona. Planeta, 2021, 1252 p.

福嶌教隆

1. はじめに

表題の２冊の刊行物は、スペイン語年鑑の創刊号と第２号である。創刊号はスペイン王立学士院（Real Academia Española. 以下 RAE）単独の編集だが、第２号は RAE とスペイン語学士院連盟（Asociación de Academias de la Lengua Española. 以下 ASALE）との協同編集となっている。創刊号の目的は RAE が2020年にどのような活動をしたかを知らしめることであり、第２号の目的は主に ASALE が2021年までにどのような活動をしてきたのかを知らしめることである。しかし同時に、各々、2020年および2021年のスペイン語圏全体におけるスペイン語の諸相についての詳細な記録にもなっている。

本書評では、まず創刊号の全体像を示した後、いくつかの話題を取り上げて管見を加える。次いで第２号について手短に論評する。

2. 創刊号（Crónica de le lengua española 2020）の概要

創刊号は、序論と13の章で構成されている。第１章、第８章、第９章は、2020年に至るまでの話題を扱っている。第１章「均質性と多様性」は、G. García Márquez らラテンアメリカ出身の４人の文豪のかつての講演を収める。第８章「RAE の足跡」は、RAE の創設期の状況などを扱う。第９章「RAE 会員の講演」は、1889年に入会した B. Pérez Galdós（1843–1920）、1975年に入会した M. Delibes（1920–2010）の入会記念講演を収録している。2020年は前者の没後100周年、後者の生誕100周年に当たる。

その他の章は、最新の状況を伝えている。第２章「辞書、その他の基本出版物等の絶え間ない改訂」は、辞書、文法書、電子コーパスなどの改訂作業の進

行状況を示す。第３章「言語の辞書の編纂技法」は、辞書作りの現場からの話題をまとめている。第４章「言語使用についての RAE の処方」は、RAE のホームページに設けた質問コーナーについて、また、solo 及び指示詞のアクセント記号に関する規則について扱う。第５章「包括的言語使用に関する議論」では、lenguaje inclusivo に関する RAE の立場を説明している。第６章「デジタル分野におけるスペイン語」は、電子媒体におけるスペイン語使用についての構想「LEIA」などを紹介する。第７章「専門分野における言語使用」は、法律、科学、演劇における用語を論じる。第10章「私たちの書籍」は、2019〜20年に RAE が刊行した書籍、同会正会員が著した書籍を紹介する。第11章「私たちの逐次刊行物」は、Boletín de la Real Academia Española 及び Boletín de Información Lingüística de la Real Academia Española を紹介する。なお、前者は2016年以降、また後者は2012年の創刊号より、無料の電子版のみの刊行となっている。第12章「教育、意思伝達、文化の主導」では、2020年に RAE がおこなった催しの報告などが記されている。そして第13章「スペイン語圏における今年の言葉」をもって本書は結ばれる。2020年に最も多用された10語として同章が挙げるのは、cuarentena, pandemia, coronavirus, confinamiento, contagio, distanciamiento, mascarilla, teletrabajo, asintomático, incertidumbre であり、新型コロナウイルスが猛威を奮ったこの年を、言語使用面から浮き彫りにしている。

3.『スペイン語新文法』改訂版発行の計画

創刊号第２章の第５節（p. 201–217、I. Bosque 執筆）では、2009年、2011年に刊行された『スペイン語新文法（Nueva gramática de la lengua española）』の改訂の作業についての報告がある。近年、文法や音韻体系の研究が著しく進んだので、その成果を反映させるべく改訂に踏み切ったとのことである。その一例として、メキシコや中米に見られる María llegó a su casa *hasta* las cuatro.（マリアは４時に帰宅した。）のような hasta の用法を挙げている。初版ではこれを否定辞 no の省略とみなしたが、この説明方法には難点が多いことが明らかになったので、修正の必要があるという。

また、①地理的、社会的な語法、発音の違いを一層精密に記述する、②初版では RAE の文法書の伝統に従って参考文献を記さなかったが、改訂版では掲載する、③章立てなどの大枠は変更しない、④電子版のみの発行とする、といった方針に則り作業を進め、数年以内の完成を目指すとのことだ。

初版よりもさらに充実した文典の出現は、日本のスペイン語研究教育者にとっても大きな刺激かつ助けとなる。私たちは当面は初版をひもときつつ、改訂版を待ちたい。

4. RAEに多く寄せられる質問

創刊号第４章の第１節（p. 375–426）は、言語使用についての質問と RAE からの回答を列挙している。近年は電子媒体による表記についての問い合わせが多いようだ。例①「笑い声の擬音語は、どう表記するのが正しいか？」（回答：電子媒体では jajaja という表記が多く見られるが誤りである。ja, ja, ja と書くべし）。②「*emoji*（日本語からの借用語）は文中のどの位置に記すべきか？」（回答：文全体に関係する場合は文を締めくくったあとに置く。Hola a todos. ☺　文の一部に関係する場合や、語句を *emoji* で代替する場合は文中に置く。Te llamo más tarde, cuando llegue a ⌂. [= casa]）。

また、2020年は新語「COVID-19」についての質問が際立つ。③「COVID の強勢母音は O か、I か？」（回答：I）。④「covid-19という文字表記は可能か？」（回答：可能。この語は英語の *COrona VIrus Disease* から作った頭字語であるから、元来は全て大文字表記だが、現在は普通名詞化しているので小文字も可）。⑤「COVID-19は男性名詞か、女性名詞か？」（回答：ともに可。主要部 *disease* に対応するスペイン語は女性名詞 enfermedad だから、本来は la COVID-19となるべきだが、男性名詞 coronavirus, ébola などの類推から el COVID-19という用例も広く見られる。これも可とする）。

言語の使用に一定の規律を設けようとする RAE の努力と、必ずしもそれに従わず自由に変化する言語との対比が、これらの問答に反映されている。日本のスペイン語研究教育者にとっても有益な内容である。

5. 包括的言語使用

創刊号第５章の第２節（p. 466–527）は、①言語における性差別、②職業名称の女性形、③総称的男性形（masculino genérico）についての RAE の立場を詳しく説明している。③の項では、「スペイン語の男性形には総称用法（例：los derechos de los *ciudadados*）と特定用法（例：Luis es un *ciudadano* ejemplar.）があること」、「前者のほうが後者に先駆けて発生したこと」、「従って総称的男性形を男性優位的発想の名残りだと考えるのは誤りであること」を説く。また、総称的男性形の代案として、「２つの形式を並置する（los alumnos y las alumnas）」、「集合名詞を用いる（el alumnado）」などを挙げ、それぞれの長所、

短所を指摘する。

本章は、今日、大きな問題となっている「包括的言語使用」についてのRAEの立場を明示したものであり、この議論に加わる全ての人が参照すべきである。なお、総称的男性形の代案として、alumnes, alumnxs, alumn@s のような形式も存在するが、本章ではこれには立ち入った検討をしていない[1]。

6.「LEIA」の構想

創刊号第6章の第1節（pp. 529–539）の表題となっている「LEIA（Lengua Española e Inteligencia Artificial）」とは、電子媒体におけるスペイン語の正しい使用を維持しようとする構想を指す。これはRAEがTelefónica, Google, Microsoft社などと協力して進めている企画で、スペイン語の文字表記や表現形式の自動修正機能の充実や、自動翻訳機能の高性能化などを目指している。LEIAという呼称は、映画「スターウォーズ」の登場人物名とのかけ言葉になっているとのことで、立案者たちの遊び心が感じられる。

自動修正機能の充実は、確かにいわゆる「言葉の乱れ」を防ぐ効果があるだろう。だが日本語話者の経験からすれば、和文入力の際、漢字変換などの便利な機能に依存して、漢字運用能力が低下しがちなので、それと同類の弊害が生じる可能性を想定しておくべきではないかと思われる。

7. 第2号（Crónica de le lengua española 2021）の概要

第2号では、ASALE及びそれを構成する23のスペイン語学士院の活動報告にほぼ全ての紙数が割かれている。随筆調の項が目立つが、「ボリビアのスペイン語の状況」（p. 354–368、T. Alvarado Teodorika 他執筆）、「スペインの若者の俗語の様相」（p. 677–694、E. Gavilanes Franco 他執筆）のように、実質的な情報を提供する項も多い。

各学士院が挙げる2021年に多用された語句の項（p. 1202–1251）では、cepa（株。例：cepa Ómicron）、inmunidad de rebaño（集団免疫）など、前年に続き新型コロナウイルス関連の例が大勢を占めている。

8. むすび

これら2冊の報告書では、2020～21年のスペイン語の状況が活写されている。創刊号では、パンデミックがスペイン語にどのような影響を与えたか、包括的言語使用の議論では何が問題になっているか、電子媒体によるコミュニケーションがスペイン語をどう変えたか、などの極めて今日的な話題が提示される。そこには、事態を客観的に把握しようとする視点と、何らかの制御をしようとする規範的視点とが示されている。第2号は、ラテンアメリカのスペイン語圏だけでなく、アメリカ合衆国、赤道ギニア、フィリピンの状況についても詳しく知ることができる。どちらも、最新のスペイン語に関心を持つ者にとっては、またとない知的基盤である。

敢えて問題を挙げるならば、あまりにも浩瀚なので、「RAEとASALEがどんな活動をしているかを一般の人に知ってもらおう」という本シリーズの趣旨に反して読者に敬遠されはしないか、という点がある[2]。2022年はA. de Nebrija没後500周年に当たるため、第3号も充実した内容になると予想されるが、極力紙数を抑える配慮も必要であろう。

また、「世界におけるスペイン語を俯瞰する」という見地から、今後は、スペイン語圏以外の地域でおこなわれるスペイン語学、スペイン語文学の研究教育についての項を設けることも意義があるのではないかと考える。

注

1） 包括的言語使用については、糸魚川（2021）、岡本（2021）などの研究がある。また、RAEの対応については福嶌（2021）にも言及がある。

2） なお、創刊号には以下の誤記がある。p. 192の引用部右欄10行目の記号「○」は中に「×」が必要。同p. 211の5行目のconflicticosはconflictivos。

引用文献

福嶌教隆．スペイン王立学士院（Real Academia Española）―スペイン語の規範と記述を追究する人々―．ことばと文字．2021, 14, p. 84–91.

糸魚川美樹．「包括的言語使用」をめぐる議論―スペイン語を例に．日本ロマンス語学会第59回大会口頭発表．2021.

岡本淳子．スペイン演劇の翻訳におけるジェンダー―スペイン語の言語的特徴と社会における女性像から考える―．Estudios Hispánicos, 2021, 46, p. 41–69.

RAE-ASALE. Nueva gramática de la lengua española. Morfología, Sintaxis. Madrid. Espasa, 2009. 2 vols., 3886 p.

_____. Nueva gramática de la lengua española. Fonética y fonología. Barcelona. Espasa, 2011. 532 p. + DVD.